

名古屋の街と博覧会

— 都市発展の軌跡 —



明治43年 鶴舞公園

池田 誠一

【7】戦後と博覧会 …常設の展示場

1 博覧会の目的と戦後

戦前の博覧会の目的は産業振興でした。各地の産品を展示、評価するというのが、大きな規模の博覧会では基本とされていたのです。

ところが第2次大戦の後には、日本の都市は破壊され、まずハードな建物やインフラの建設が優先されることになりました。そして昭和30年代の高度成長期になると、重化学工業を中心に産業の急成長や技術革新がありました。このため従来のような産業振興という博覧会のニーズがなくなってしまったかのようです。そして名古屋ばかりでなく全国的にも大きな博覧会は開かれていません。

ところが東京オリンピックの前、にわかに万国博構想が動き出すことになりました。戦前の昭和15年、オリンピックと同時期に計画されて中断(延期)されていた日本万国博覧会が、オリンピックにつられて息を吹き返したようです。今回は、終戦から万博へ、そして次のポートピア81へと続く戦後の日本の博覧会の流れを追いつつ、戦後の名古屋の博覧会を考えてみたいと思います。

2 戦後の博覧会

(1)復興から万博へ

戦後の我国の博覧会は、終戦後1、2年から、まず、テーマが「復興」「貿易」「観光」などの地域振興で始まりました。昭和25年ごろには、子供の日や児童憲章の制定で「子供」をテーマにした博覧会が目立ちます。

30年代から40年代にかけては、テーマは「科学」的なものが多く、「宇宙」「原子力」などと未来志向が多くなります。しかし以上はいずれも規模は小さく、多くは公園や遊園地の催事を博覧会と名付けたもののようです。

ところが、30年代末、万国博開催の機運が出てきたのです。その候補地もいくつかあったようですが、東京オリンピックとバランスを取る意味でしょうか、大阪に決まりました。そして大阪市の北の千里丘陵の一角で「日本万国博覧会(以下、大阪万博)」が開催されたのです(図1)。テーマは『人類の進歩と調和』。期間は3月から9月までの半年間。6,421万人という大量の入場者を集めることになりま

山公園の一催事だったのではないのでしょうか。東山公園では以後も何回か、博覧会と称するイベントが行われています。

これらの東山公園の博覧会を除くと、戦後博覧会等の大きなイベントが登場する

るのは戦後30年以上たった50年代の後半、ちょうど神戸のポートピアが成功を収めた後になります。それらは次の3つです(図2)。

- ①57年 シスターシティフェア(吹上) 26万人
- ②59年 名古屋城博(名古屋城) 192万人
- ③60年 ワールドインポートフェア(金城ふ頭) 188万人

①は、姉妹都市の参加を得てその友好を深めるためのものでした。吹上ホールの改修を機に行われ、4つの姉妹都市に関する展示があり、小さな博覧会でした。

②は、名古屋城再建25周年のイベントで、金のシャチを下に下ろしたことによって人気が出て、予想以上の入場者がありました。

③は、商工会議所が音頭をとった、輸入をテーマにした博覧会でした。貿易摩擦という時代の中です。そして多くの市民を集め、名古屋港の国際展示場が注目される機会になりました。

ところが、これらはいずれも1つのイベントで、都市の博覧会として企画されたとは考えられません。名古屋は、成長著しかった工業や大成功を修めた戦災復興のために博覧会の力を借りる必要がなかったのでしょうか。

しかしその一方で、新しいニーズに合わせて整備がすすめられたものがありました。吹上のホールや金城埠頭のメッセ会場などの展示場です。その背景には、時代が博覧会から展示場へと、ニーズの大きな変化があったの

略 称	名城博	輸入博
名 称	名古屋城博 名古屋城天守閣再建25周年記念事業	ワールドインポートフェア ナゴヤ'85
テーマ	‘人と城’のまつり —金シャチとの出会い—	ひろげよう国際交易の輪
会 場	名古屋城内(28ha)	名古屋国際展示場(15ha)
会 期	昭和59年9月29日～11月25日 (58日間)	昭和60年3月21日～4月14日 (25日間)
入場者	192万人	188万人
その他	—	海外44ヶ国・地域

図2 名城博と輸入博

だと考えられるのです。

3 紀行 名古屋の常設展示場

… 吹上ホール、国際展示場 …

それではまず、それらの展示場を歩いてみましょう。代表的な吹上ホールと金城ふ頭の国際展示場をまわります。

〈吹上ホール〉

地下鉄桜通線の吹上駅で降りて、5番出入口を上ります。そのまま百米道路を西に300



吹上ホールへの道。左は吹上公園



名古屋の中小企業の拠点・中小企業振興会館



ビルの奥にある「吹上ホール」(西側)

さらに進むと、左側に大きなビルの中小企業振興会館があります。ホールはその裏側です。戦後の名古屋の産業政策は中小企業対策が大きな柱になっており、その振興の拠点として昭和41年に建設されました。そして57年に今日のような姿に新装されたものです。

建物の中に入ると、中小企業関係の市の施設が多く入居しており、その他に、大小のホールや国際会議場等があります。その大ホールが通称「吹上ホール」と呼ばれており、5,300平方メートルの広さがあります。今日では中規模クラスまでの展示会会場として利用されています。

この施設は、刑務所の跡地利用の一環で確保された土地です。このためこの施設の問題は、当初からアクセスでした。それでも始めは近くに市電がありましたが、廃止後そのルートに地下鉄が出来るまでの間は、車が頼りでした。施設が孤立しているためでしょうか、出来て50年近くたちますが、都市づくりの上であまり効果を発揮していないのがさみしいところです。

〈国際展示場〉

名古屋駅からあおなみ線で、24分。終点の金城ふ頭駅で降ります。改札口を出て、右に歩道橋を渡ります。歩道橋を降りて正面の階段を上りまっすぐ進むと、正面に国際展示場(愛称：ポートメッセ)の建物があります。

正面のビルが各展示場を結ぶ交流センターです。中に入り、右手方向に通り抜けると、広場の向こう側に当初造られた丸いドームの1号館があります。この建物は、14,000平方



あおなみ線の金城ふ頭駅。
展示場へは5分弱で



国際展示場(ポートメッセ)の正面。
建物は展示場をつなぐ交流センター



当初、昭和48年にできたドーム型の1号館

メートルの展示面積を持ち、48年、ドームのはしりの頃の建物です。が、残念ながら空調が出来ないようで、改修の計画があります。ここで、60年、「ワールドインポートフェアナゴヤ'85」(輸入博名古屋)が行われ、25日間で188万人を集めたのです(図3)。今は、2号館、3号館があり、展示場面積は34,000平方メートルになりました。

1、2、3号館をぐるりと見渡して、北側の入口から駐車場に出ます。振り返ると大きな展示場群が見渡せます。総面積は20㍻。



図3 インポートフェアで賑わう金城ふ頭の国際展示場



北側の駐車場。
向こうに、伊勢湾岸道路のインターが見える



広い駐車場では、近々、「レゴランド」の建設が始まるちょっとした博覧会の規模があります。この駐車場の部分は、近々テーマパーク「レゴランド」が出来ることになり、それに合わせて展示場も大きく変わるようです。駐車場東側の出口を出て右に歩くと正面に戻ります。レゴランドと引き換えに造られる新しい展示場は金城ふ頭駅の東側、わが国でも最大級の展示場が構想されています。金城ふ頭一帯は、

近くのリニア鉄道館、レゴランドとあわせて常設の博覧会場といえるものになるのかもしれません。

4 博覧会と展示会

戦後の工業の発達と技術革新の進展は、産業振興に新しいニーズを生みました。それは「展示会」です。時代の急速な変化は、これまでのように何年かに一度の博覧会では対応できなくなってきたので

です。このため、業種毎に、あるいは各テーマ毎に、それに関する企業が集まって、頻繁に大きな展示会が開かれるようになりました。

そうなるに必要なのは、博覧会のように大きな会場ではなく、専門の展示場です。そして、いちいち建設するのではなく、すぐ利用できる常設の展示場が必要になったのです。

昭和30年代後半から、全国の大都市では一斉に大規模の展示場を作り始めました。そのトップを切ったのは34年、東京・晴海の展示場です。名古屋が吹上にホールを作り、金城ふ頭に国際展示場を作ったのもこの時期でした。さらに、この需要は拡大を続け、広範囲の出店者を集めるため、次第に大規模なものが要求されるようになりました。その競争は今日もつづいています。

このように施設整備が進んだためでしょう。博覧会はその目的だった「産業振興」という分野がなくなりました。そしてその後の地方博覧会は、地方振興、いわば「地域の活性化」を目的として開催されることになるのです。

〈主な参考文献〉

- ①吉見俊哉『万博幻想』(2005、ちくま新書526)
- ②「博覧会資料集」(2013、乃村工藝社HP)
- ③「名古屋城博報告書」(1985、同開催委員会)
- ④「ワールドインポートフェアナゴヤ'85公式記録」(1985、財名古屋輸入博協会)